

れるのである。

そこで次に、その歴史的な叙述の箇所について考察することにしよう。それははこういう言葉で始められている。

「この教説がいかにして成立し、カルヴィニズムの神学思想のうちにもどのようにして採り入れられていったかについては、簡単に述べるにとどめてもよからう。それには二つの道が可能だった」(151頁)。

この最後の文章の意味はわかりにくい。「それには」の「それ」は原文では明らかに「この教説」つまり「予定説」を指している⁴⁾。そうすると、予定説にいたる二つの道が可能だと言っていることになるが、それはどういうことなのか必ずしもはっきりしない。梶山訳は「この教説の生まれるためには二つの道が可能であった」として、予定説の成立の二つの道と解しているようである。たしかにあとに続く文章は予定説の成立の問題を論じている。ウェーバーは次のように書いている。

「アウグスティヌス以来キリスト教史の上に繰り返り現われてくる偉大な祈りの人のうちでも最も能動的で熱情的な人々のばあい、宗教的な救いの感情は、すべてが一つの客観的な力の働きにもとづくものであって、いささかも自己の価値によるのではない、という確固とした感覚に結びついて現われている。すなわち、罪の感情の怖ろしい苦悶がとりさられたのち、喜びにあふれた信頼の力づよい情感が、一見まったく突如として彼らの上にのぞみ、そうしたかつてない恩恵の賜物が何らか彼ら自身の協力によるものとか、彼ら自身の信仰や意志の業績あるいは性質に関連をもつなどと考えることをいささかも許さなくなるのだ。ルターも彼の宗教的天才が最高潮にあり、あの『キリスト者の自由』を書くことのできた当時には、神の『測るべからざる決定』⁵⁾こそ自分が恩恵の状態で到達しえた絶対唯一の測りがたい根源だ、とはっきりと意識していた」(151頁)。

ここで予定説の成立のことがいわれているのは明白であるが、これと「二つの道」との関係はど

うなるのであろうか。これを「二つの道」のうちの第一の道の説明と受け取るのが自然であろう。しかし問題は、それに続いて、予定説成立の第二の道の説明が与えられていないことである。ルターについて語りはじめたウェーバーの筆は、ここで予定説の成立からその後の経過の説明に移ってゆく。すなわち、ルターはその後も予定説を捨てはしなかったが、「それはもはや中心的な位置を占めるものではなくなったばかりでなく、彼が責任ある教会政治家としてしだいに『現実政治的』となるにしたがって、ますます背景に退いていった」(151-152頁)と言う。そしてルター派の場合にはその方向がさらに押し進められていったという意味の叙述がこれに続く。そして次に、ルターおよびルター派の場合と対比してカルヴァンおよびカルヴァン派における予定説の発展のことが述べられる。すなわち、「カルヴァンの場合にはことからの経路はそれとはまさに逆で、教義上の論敵に対する論争がすすむにつれて、この教理の重要性が目に見えて増大していった。予定の教説がはじめて十分に展開されたのは彼の『キリスト教綱要』の第三版(1543年)であり、さらに、それが中心的な位置を占めるにいたったのは、ようやく彼の死後、ドルドレヒトとウェストミンスター⁶⁾の宗教会議がその決着をつけようとした大規模な文化闘争のさ中においてだった」(152頁)といわれている。こうなると、ウェーバーのいう「二つの道」とは予定説の単に成立だけではなく、その後の展開をも含んだものということがわかる。それではこの「二つの道」とは具体的に何を指しているのであろうか。明らかなことは、この箇所でウェーバーがルターの行き方とカルヴァンの行き方とを対比していることである。そしてこの対比の議論をいわば締め括るように、ウェーバーは次のように言う。

「まさにカルヴァンにおいては、この >>decretum horribile<<『恐るべき聖定』の教理はルターのように体験によってえられたのではなく、思索によってえられたのであり、したがって神の

4) 大塚訳の「それ」は自然に読むと、予定説の成立とそれがカルヴィニズムに採り入れられていった経過を指していることになるが、そうするとアウグスティヌスから始まってルターに及ぶ後続の文章と論理的に整合しない。
5) 大塚訳も梶山訳も、Ratschluß, Ratschlüsse, decretum, decree におおむね「決断」という訳語をあてているが、「決定」あるいは「聖定」という訳語を用いる。